

磯田知里さん

車いすで海外旅行へ！
夢を実現させるトラベルヘルパー



つたなつて思います」

トラベルヘルパーは、個人旅行、団体旅行にも関係なく、要請があればどんな旅行にも同行し、介助してくれるが、比較的多いのは家族旅行への同行だという。そんなとき、磯田さんはときに娘のように、時に孫のように家族に溶け込み、皆さんの旅の思い出づくりを手伝っているそうだ。

数時間の外出から旅行まで 行けないところなんてない

もともと福祉系の高校で介護の勉強をし、卒業後は介護施設で働くつもりだったというだけあって、磯田さんのポテン

シャルは高い。入社後はNPO日本トラベルヘルパー協会認定の資格検定試験2級にも合格した。

「トラベルヘルパーは、まずお客様の身体の状態をうかがい、行き先などの要望を聞き、それに合わせて旅程をつくります。オーダ

ーメイドの旅ですから内容はさまざまですが、温泉に行きたいという声は多いですね。宿泊先は、特にご希望がなければバリアフリーの宿を手配しますが、時には、昔泊まった思い出のホテルに泊まりたいという方もいらつしやいます。バリ

散歩の途中に庭で会った人たちと挨拶



周囲の人たちとの
コミュニケーションも大事。

望に沿ったプランニングをしています」

たとえば介護用のベッドがないという場合でも、ホテル側と折衝して介護用品を扱っているところからレンタルしてもらうこともできる。お風呂用の車いすがないところは持ち込むこともしばしばだ。こうしたことは、いつでもどこでも受け入れOKとはいかないが、できるだけ交渉をする。それもトラベルヘルパーの大事な仕事だ。

また、旅行だけでなく、ちよつとした

外出や買い物などにもトラベルヘルパーはお供してくれる。

「車いすに乗るほどじゃないけど足腰が弱くて心配なので、旅の途中の介助を依頼される人もいます。家族で旅行される場合だと、移動中は問題ないけど入浴支援だけ頼みたいということもあります。重度の方だと入浴介助は結構大変なんです。2名体制で抱えあげるなど、人数も技術も必要だし、そういう場合は入浴だけのスポットで介助に行くこともあります。旅行以外でいえば、お孫さんの結婚式での介助などをよく頼まれますね。結婚式って、皆さん忙しくて、ついお世話が行き届かなくなるんです。私たちがお手伝いすることで、ご家族も安心して式を楽しめる。メリットは大きいと思いますよ」

避難生活で疲れた人たちの 入浴サービスをお手伝い

最近、特に印象的だった出来事として、

磯田さんは、東日本大震災のあと、宮城県石巻市にある牡鹿半島の避難所で生活している方々を旅行に連れていくプロジェクトを挙げた。

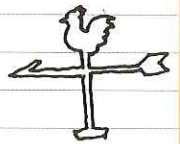
2泊3日で山形県最上町に行くツアーだったが、参加者にひとり、車いすのおばあちゃんがいた。もともと車いすだったわけではなく、避難所生活で出歩くことが減り、だんだん歩けなくなつたのだという。最初は旅行を躊躇していたおばあちゃんを、明るくお世話をしたのが磯田さんだった。

「久しぶりのお風呂をととても喜んでくれました。夜、二人で何をしましょうかって相談しているうちに、あつというまに熟睡しちゃって……。避難生活でかなり疲れていたんだなあ、お連れできて本当に良かったなつて思いましたね。宿泊したのは、保養センターもがみ」というところで、地下1階部分にはデイサービスセンターがあり、いつでもヘルプを頼めたのも心強かつたです。最近の旅館には



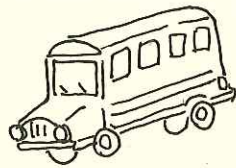
磯田知里さん

車いすで海外旅行へ！
夢を実現させるトラベルヘルパー



介護資格を持っているスタッフもいるんですが、実際には介護経験はない、という人も多いんです。でも、デイサービスセンターの方は全員即戦力ですから、とても安心でした」

最上町は、実は約15年前から老人福祉の分野で、厚生労働省のモデルケースとしてさまざまな取り組みをしてきた町。なんと町民1000人がホームヘルパーの資格を持っているのだとか。これからは、ますます介護旅行も増えていくはずで、最上町のような受け入れ態勢の整った市町村が増えれば、利用者も安心して旅行が楽しめるだろう。



お客様と河口湖の
オルゴール館にて



お土産選びのお手伝い
どれがいいかしら？

伊豆も注目されています。観光協会がバリアフリーガイドブックを作っていて、これを見れば、どの旅館に車いす対応のトイレや風呂があるか、ベッドは設置されているか、特別食の対応があるかなどが、ひと目でわかるんです。とても便利です。観光協会の方も、3人がトラベルヘルパーの認定を受けていて、現地を手伝える環境を整えてくれている。ありがたいですね」

ホスピタリティの心で お客様に接したい

いくつになっても、体が弱っても、トラベルヘルパーがいれば旅は楽しめる。

た散歩から海外旅行まで、さまざまな外出を可能にするため、トラベルヘルパーは全力でお手伝いをする。

実は磯田さん自身は、海外への介護旅行は未経験だという。いつかは行きたいですが、とたずねると、うれしそうにうなずいて、

「実は、何度か入浴介助を利用された障がいを持ったお客様が、まだ17歳なんですけど、同じ障がいを持ったお友達とハワイに行きたいと言っているんです。『私も行ったことないんですよ』って言ったなら、『じゃあ一緒に行きましょう！』って言ってくれて。それが今、すごく楽しみです。ハワイはバリアフリーが行き届いていると聞きまますから、そういったものもちゃんと見てきたいし、ぜひ行ってみたいんです」

高齢化社会が進む現代、介

介護旅行の体験者は誰もがそのことに気づく。そして「もつと旅に出よう」と続々とリピーターになっていく。これは担当者としては、やりがいがある反面、責任も重大だ。

- あ・える倶楽部では、安全に楽しく旅を遂行するため、お客様には次の3つのことを確認している。
- ① お客様ご自身が旅行に行きたいという意志を持っていること。
- ② ご家族やそれに代わる人（日常生活に関わる人）が同意していること。
- ③ 主治医やケアマネージャーの許可があること。

この3つの条件が整えば、ちよつとし

護の資格を持った「トラベルヘルパー」の需要はますます増えていくに違いない。そこで、先輩のトラベルヘルパーとして、磯田さんにその心得をうかがってみた。

「私たちは常にお客様の身になったお手伝いを心がけています。たとえば、車いすを押すときでも、無言で歩くよりも、おしゃべりを楽しみ、心の触れ合いを感じながら歩くようにしています。その一方で、なるべく静かに車いすを押す技術も習得してはなくてはなりません。たとえば、砂利道などを歩くと、どうしてもガタガタしてしまいます。そんなときは、どうすると思います？ 実は後輪のほうの前輪より大きいので、前輪を浮かせて後輪だけで進むといいんです。そんなちよつとした気遣いで、利用される方も気持ち良く旅を楽しむことができます。大事なのはホスピタリティの心をもって、お客様に接すること。これが、トラベルヘルパーにとっては一番大切なことだと思います」